

## 日韓米国際共同教育プログラム「アジア太平洋カレッジ」Campus Shareによるグローバル人材育成

崔, 慶原  
九州大学韓国研究センター

<https://doi.org/10.15017/1650910>

---

出版情報：基幹教育紀要. 2, pp.149-165, 2016-03-30. 九州大学基幹教育院  
バージョン：  
権利関係：

# 日韓米国際共同教育プログラム「アジア太平洋カレッジ」 Campus Share によるグローバル人材育成

崔 慶原

九州大学韓国研究センター, 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1

## The College of Asia Pacific (CAP) Japan-Korea-U.S. international collaborative education program for raising global leaders through campus share

Kyungwon CHOI

Research Center for Korean Studies, Kyushu University, 6-10-1, Hakozaki, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581, Japan

E-mail: [choi.kyungwon.790@m.kyushu-u.ac.jp](mailto:choi.kyungwon.790@m.kyushu-u.ac.jp)

Received Nov. 30, 2015; Revised Jan. 8, 2016; Accepted Jan. 15, 2016

The College of Asia Pacific (CAP) is a two-year cycle joint program oriented as an “international experience” with the theme of “What are the common challenges of East Asian countries?”. Its program aims to help young students to understand each other beyond borders, and to become global leaders through ‘Campus Share’ among US, Japanese, and Korean universities. It is administered by the Center for Korean Studies, Kyushu University and is supported by the special-grant from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), Japan. In the first year, six universities will operate a two-week program in collaboration with each other. Three are Japanese: Kyushu University, Kagoshima University, and Seinan Gakuin University, and three are Korean: Seoul National University, Yonsei University, and Pusan National University. Passing through the cities where the universities are located –Seoul, Pusan, Fukuoka, and Kagoshima– students will participate in various programs including special lectures in English, field trips, company internships, and other cultural experiences. Students will be able to have a perspective on the stability of East Asia through Japanese-Korean cooperation. In the second year, CAP will hold a three-week program in Hawaii with a total of seven participating universities including the University of Hawaii, with special lectures, field trips, business workshops, English presentations, international engagement among US, Japanese, and Korean students, and other cultural experiences. Students will be able to challenge the global agenda.

## 1. 国際共同教育の基盤づくり

### 1.1. 先行プログラム「日韓海峡圏カレッジ」の成果—日韓2大学で「Campus Share」

九州大学韓国研究センターは、2011年度から2013年度まで1年生を対象にした「日韓海峡圏カレッジ」を文部科学省特別経費で実施した。同カレッジは、海峡を挟む福岡と釜山の代表的な大学である九州大学と釜山大学校の2大学間コラボレーションによって推進された。両大学の1年生それぞれ50名ずつ、合計100名の1年生が、夏休みを利用して釜山と福岡を行き来しながら、本学

と釜山大学校で一緒に学ぶ「キャンパス共有」を行った。当時日中韓政府で構想されていた「CAMPUS Asia」に先駆けて、日韓を基軸とした人材育成プログラムとしてスタートしたコラボレーションである。1年生という早い時期に、外国の学生との協学の必要性に気づき、アクティブな学び方を身につけるとともに、海外志向を持って留学の必要性に気づくきっかけを提供する狙いがあった。

キャンパス共有を可能にしたのは、2大学コラボレーションによるカリキュラムの共同開発を初めとする共同教育体制づくりであった。九州大学韓国研究センター内に、基幹教育副院長をはじめ、学内12部局から選出された16名の教職員（教員12名、職員4名）が参加する運営委員会を組織した。教育の質保証に重点をおいた議論を重ね、プログラム企画や実施を行なった。また、韓国の釜山大学校と共同教育委員会を組織し、事前準備だけでなく、プログラム実施後の評価をもとに、共同で改善策を見出すなど、プログラムの充実化を図ることに力を入れた。このような教育の質保証のための基盤の上に、九州大学（集中講義として開講）と釜山大学校内での単位化を2012年度に実施し、2013年度からは単位互換協定に基づいた単位互換を両大学間で実現した。それに当たり、九州大学の教務委員会では、本プログラムのカリキュラム構成や教育目標及び養成しようとする人材像について審議を行い、単位互換を承認した（2013年3月11日）。その後毎年プログラムの実施前には、教育企画委員会にカリキュラムの変更及び改善部分を報告し、承認して頂いている（2015年7月9日）。このように、学内外の組織的な取組みにより、本プログラムは教育の質保証を伴う国際共同教育プログラムとしての基盤を固めることができた。

教材に関しては、カリキュラムの策定に関わった両大学の教員が協力し、*What is the common challenges of the East Asian societies?*と題する英文教材を刊行するなどの活発な活動をした。東アジアの経済発展、環境問題、日韓政治経済、紛争解決など、さまざまなテーマを取り上げ、共同学習の教材として活用した。教員が両国の学生を対象とした講義や教材の準備を通して、それまでの教え方や研究の仕方を見直すきっかけとなった点もこのコラボレーションから始まった注目すべき変化であろう。

本プログラムの最も大きな特徴は、日韓混合グループでの活動である。日韓を行き来しながら実施するため、自国で受入れ役を担う時には、受け入れ国の学生が、ホストとしてリーダーシップを発揮する。普段、座学の授業に受け身で臨んでいた学生達の姿とは全く異なる面を見せてくれた。互いの文化及び生活様式を紹介し合い、フィールドワークでの調査・研究はもちろん、インターシップのプレゼンテーションでは、専門や国が異なるグループ構成員と協力し合い、課題の解決に積極的に取り組んだ。このように海峡を超えた大学間のコラボレーションをもとに、キャンパスを共有して学び合い、学生がリーダーシップを発揮できる場を設けることで、新しい学びのスタイルを見出したと考えている。

3年の間、日韓合わせて約220名の学生が日本と韓国でキャンパスを共有してきた。本プログラムに参加して自信を持った多くの学生が、その後、別の短期プログラムはもちろん、長期留学に臨んだ。九州大学の参加者110名のうち、長期留学だけでも、毎年5名程度、これまで17名の学生が、その翌年か、翌々年には交換留学をしている。これは、参加者の15%を超える割合である。渡航先は、米国、スウェーデン、フランスをはじめとする欧米や中国、シンガポール、香港、タイ、

韓国に至るまで多様である。韓国人学生との学習を通して育まれた海外志向が、彼らを次のステージへ突き動かしていることが分かる。また、本プログラムをきっかけに、本学に交換留学生として来日した韓国人学生もいる。

そして、高い志を持ち、学業に優れ、将来社会の様々な分野で指導的な役割を果たし、広く世界で活躍することを目指す学部学生に九州大学が授与する「山川賞」では、本プログラム参加者から、毎年1、2名の受賞者が出ており、これまで通算で8名が選ばれた。授与が始まった2012年以来、全学部から計35名の学生が受賞してきたことを考えれば、約23%に当たる高い割合である。その奨学金をもとに、交換留学に挑んだり、海外の大学院への留学を希望したりしている学生もいる。全員が、同賞の選考プレゼンテーションにおいて、大学1年時に参加した本プログラムでの経験を取り上げている。1年生の夏・冬休みに海外で学習する面白さに触れたことが、その後3年間の大学での学習を方向づけたことや、その成果をもとに留学計画を立てたことをアピールポイントにしていた。本プログラムが学内の取組みと好循環を生み出していることを嬉しく思う次第である。

参加学生のその後の活躍ぶりをみると、彼らにとって本プログラムは、グローバル人材となる第一歩であり、成長の原点となったと言える。本プログラムでの経験を活かして「福岡・釜山大学生未来大学生フォーラム」を立ち上げた学生たちもいる。交換留学を終えた学生が中心となり、福岡側（九州大・西南学院大・福岡大）と釜山側（釜山大・東西大など9大学）から計20名の学生が経済・文化・教育の3分野に分かれて議論を重ねた結果を提言としてまとめ、2015年の「第10回福岡・釜山フォーラム」で発表し、日韓のオピニオンリーダーたちとディスカッションを行った。学生主導の活動をリードし、日韓学生の情報交換や交流活動のプラットフォーム作りをしたのである。また、やはり本プログラムへの参加がきっかけとなって海外志向が強まり、海外勤務できる海運会社に就職した卒業生もいる。本プログラムへの参加、またグローバル人材として活躍したいという志が会社側に高く評価されたという。

こうした2大学間のキャンパス共有を通して築いた共同教育基盤をもとに、2014年度には日韓6大学140名の学生がキャンパスを共有し、2015年度にはハワイ大学に日韓の学生が集まる国際共同教育プログラムを実施することに至ったのである。

## 1.2. 発展版としての「アジア太平洋カレッジ」—日韓米7大学で「Campus Share」

「日韓海峡圏カレッジ」の成果を土台に2014年度から日韓米国際共同教育プログラム「アジア太平洋カレッジ」を、文部科学省特別経費（2014年度～2018年度）で運用している。日本からは九州大学、鹿児島大学、西南学院大学が、韓国からはソウル大学校（2015年度からの参加。前年度まで高麗大校校が参加）、延世大学校、釜山大学校という韓国トップの大学が参加している。2015年からは東アジア学に強みを持つ米国ハワイ大学マノア校（University of Hawaii at Manoa）も参加している（図1）。

本プログラムは2年を1クールとして、1年次には日韓を中心とした「キャンパス日本」「キャンパス韓国」に参加し、そこでローカルな視点を身につけた学生が、翌年の2年次には、ハワイで実施される「キャンパスハワイ」に参加し、グローバルな視点に触れる形式となっている。日韓及び東アジアに対する理解とグローバルな視野を併せ持つ人材を育成することが、本プログラムの狙い

である。

日韓を軸にしなが、米国も加わる国際共同教育プログラムの構築を手がける目的は、次のとおりである。第一に、いち早くグローバル化を進めてきた韓国トップの大学とコラボレーションすることで得られる教育的利点である。これまで韓国の大学は社会的な要求に応える人材づくりを目指してきた。その影響により、韓国人学生はグローバル志向が強い<sup>1</sup>。英語やプレゼンテーション能力において、韓国人学生のレベルの高さに刺激を受けたという話を参加した日本人学生からよく聞くが、相手が英語圏の人であったなら、彼らはそれほど驚かないであろう。同じアジア圏のすぐ隣の国の学生が一步先を走っていると思うと、より強い刺激を受けることになる。特に、新たに加わったソウル大学校と延世大学校は、韓国トップの大学であり、キャンパスを共有して1,2年生の教育に当たることで高い教育的効果が期待できる。



図1 参加大学及びプログラムの概要

第二の目的は、幅広い視野を持って問題を発見し、解決に取り組む姿勢を持つグローバル人材を育成することである。歴史認識や領土問題などに閉じられてしまいがちな日韓関係をグローバルな視点から捉え直すために、ハワイ大学を新たな拠点として加え、「キャンパスハワイ」を開始した。日韓両国は地域レベルでは異なる立場を取っている場合が少なくない。それゆえ、違いが目立つのかもしれない。しかし、世界規模のグローバル社会からみれば、両国ほど類似した国もないであろう。置かれている国際環境、産業構造、国家目標、脆弱性、抱えている政策課題などを考えると、グローバル社会の中で両国の立ち位置を把握し、協力を見出すことが可能である。「双子国家論<sup>2</sup>」や「ミドルパワー連帯論<sup>3</sup>」などは、まさにグローバル社会における日韓両国の立ち位置に基づいている。日韓が同じ東アジアの国として、アジアを先導していくための相手であることに気づかされる。世界は東アジアの安定を必要としているが、それは日韓の連携なしには実現しえないのである。このような側面から、これからの日韓両国の協力関係づくりを議論するために、第三の場所で

新しい見方に触れる機会を作る必要があると判断したのである。

また、ハワイは日本人にとっても、韓国人にとっても、様々な意味で関わりの深いところである。その歴史的、地理的な位置から、ディアスポラ（ハワイにおける日韓移民の歴史）や戦争と安全保障、東アジアと米国のかかわりを学ぶ活動を展開するのにふさわしい場所だと考えている。

このように本プログラムは、韓国やハワイという場所を利用した、現地でしか得られない経験をもとに幅広い視野を身に着け、現地の人々との協学を通して課題解決に取り組む姿勢を持てるようになることを目指す。外交・安全保障問題をはじめ、少子高齢化を含む社会問題など、日韓及びグローバル社会が抱えている共通課題に目を向け、協力可能な領域を見出していく人材を育成する。「日本人」あるいは「韓国人」というアイデンティティに加え、グローバル市民としての新しいアイデンティティが芽生え、共生の道を模索していくようになることを大いに期待している。

第三に、アジアのゲートウェイである福岡に位置する九州大学がイニシアチブをとり、九州地域の大学をリードしながら、韓国のソウルと釜山の大学と持続的に交流を図る意義は大きい。両国首脳の合意によって行われてきた「第2期日韓新時代共同研究プロジェクト」の報告書『新時代の日韓協働七つの核心的アジェンダー』では、「東京とソウルを中心とした中央集権的な日韓関係から脱却し、より多様で重層的な形へと交流・ネットワークの変化を追求する必要性」が提言された。そこで注目されたのが、福岡と釜山の地域連携を支えてきた「福岡・釜山フォーラム」であり、本プログラムの前身である「日韓海峽圏カレッジ」である<sup>4</sup>。そのために、日韓6大学のコラボレーションを軸とする本プログラムは、地方中心の多様で重層的な交流・ネットワークの構築を支える役割を果たすと期待される。2大学間の「点」と「点」の連携から、6大学間で「面」と「面」の連携を図ることは、従来の東京とソウルを中心とした中央集権的な枠組みから脱却し、福岡が日韓を結ぶ新たな拠点として機能することを意味する。この試みが、文部科学省特別経費という財政的支援と「福岡・釜山フォーラム」に参加している地元の企業（本プログラムにおいてインターンシップの場を提供している）との連携の中で「持続性」を持つ人材育成プログラムとして進められていることは、特筆すべきである。

## 2. プログラムの設計

本プログラムは2年を1クールとして学生の成長を牽引する構成を取っている。まず1年次には、事前学習、「キャンパス韓国 in 釜山」「キャンパス日本 in 福岡」（夏季）／「キャンパス韓国 in ソウル」「キャンパス日本 in 福岡」（冬季）が行われる。そして2年次には、1年次の参加学生から選抜された学生が「キャンパスハワイ」に参加する（図2）。

### 2.1. 事前学習—基幹教育科目との連携

本プログラムに参加する九州大学の学生には、基幹教育の前期総合科目である「韓国学への招待」、あるいは「韓国学との対話」の履修を義務づけている。毎年5月、200名弱の受講者から面接などを経て、夏・冬プログラムへの参加者を選抜している。同講義では、韓国への渡航前に韓国社会をはじめ、日韓関係及び東アジアの国際関係について基礎的な知識を習得してもらう。そのために教員による授業だけでなく、日韓を軸に活動している社会人を講師として招き、現場での体験をもと

にした講演も行っている。

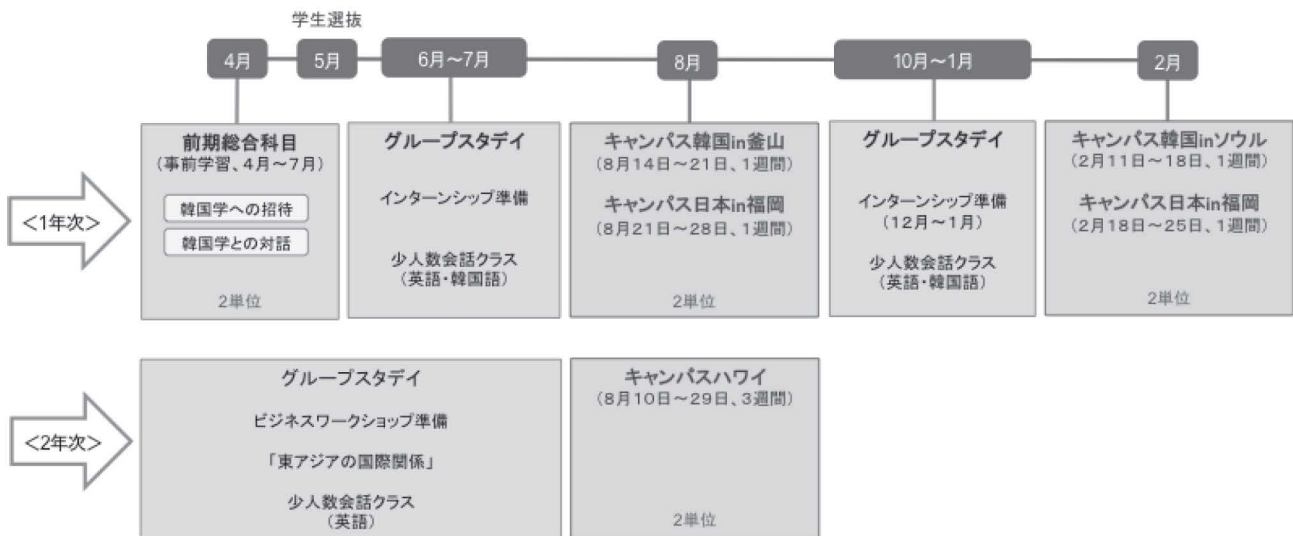


図2 年間スケジュール

選抜された学生を対象に英語と韓国語の少人数会話クラスも開講している。英語と韓国語ともに、ネイティブ講師によるスピーキング中心の授業を行う。英語クラスは高校までの英語教育で習得した語彙や文法を活用して、文章を構成する能力が向上できるように努める。また、自分の意見をまとめる力、相手の意見を理解する力など、ディスカッションができる語学力も身につける。韓国語クラスは、ほとんどの学生が初めて韓国語に触れるケースが多いため、基礎をしっかりと固めるように努め、韓国を訪問した際、基本的な意思疎通ができるレベルになることを目指している。

そして、担当教員の指導のもと、グループスタディを通して、インターンシップで実施するプレゼンテーション準備を行う。後述するが、企業から事前に提示されたプレゼンテーションテーマを持って、各学部から集まった5人の学生が一グループになり、約2カ月かけて調査・研究を進め、課題解決に取り組む。

## 2.2. 「キャンパス日本」「キャンパス韓国」(1年次)

「キャンパス日本」「キャンパス韓国」は、2週間で日韓を行き来するが、特別講義、フィールドワーク、プレゼンテーションの三つのカテゴリーで構成されている。「キャンパス日本」で行われる全てのプログラムは、講義(座学)と実習を合わせた基幹教育の集中講義「東アジア社会の共通課題は何か」という科目で開講している。講義を含む全ての活動は基本的に英語で行われる。夏季プログラムに日韓100名、冬季プログラムに日韓40名の学生が参加した。

### 1) 特別講義：日韓及び東アジア社会の共通課題を取り上げる

各講義は6大学の教員がそれぞれの大学キャンパスで担当した。各大学の強みを活かした多様な観点からの問題提起を行うという考えのもとで、各大学で準備した。どれも特殊なテーマであり、

普段各大学での講義では接することができない内容になっている。これまで行ってきた主な講義は、日韓関係の過去と現状をはじめ、安全保障協力、経済開発、環境汚染、教育問題、自然災害など、日韓及び東アジア社会が抱えている共通課題にフォーカスしたものである（表 1）。

表 1 「キャンパス日本」「キャンパス韓国」における特別講義

- The Past and Present Relationship between Japan and Korea
- Japan-Korea Cooperation, East Asia and beyond
- U.S.-Japan-Korea Trilateral Cooperation
- Structural Agricultural Reforms in Relation to Market Liberalization
- Trans-Boundary Environmental Issues: A Socio-economic Analysis on the Dust and Sandstorm
- Food Security in Korea and Japan: How should We Achieve It?
- Comparison of Education System in Japan and Korea
- Science and Technology in Japan and Korea
- Earthquakes and Volcanic Eruptions
- Display Industry and Future in the Korea and Japan
- Introduce to the Fukuoka-Busan : Supra-Regional Economic & Cultural Zone

2014 年度の場合、別所浩郎在韓日本大使とマーガレット G. マックロード (Margaret MacLeod) 在福岡米国領事 (2015 年度も担当) の二氏が、外交現場の経験を交えながら、それぞれ東アジアにおける日韓協力関係と日韓米 3 国の協力関係に関する講義を担当した。日韓の懸案問題に対する解決のみならず、安全保障問題に対する日韓米の動きに至るまで、幅広い分野に対する質疑応答が行われた。それぞれの講義内容は、その後のディスカッションやプレゼンテーションの時間に、テーマあるいは話し合いの材料として取り入れられた。

## 2) フィールドワーク：学生主導による調査

日本の学生 5 名、韓国の学生 5 名という混合グループを作り、参加学生の主導でフィールドワークを行うようにした。キャンパス韓国 in ソウルでは、ソウル大学校と延世大学校の学生が、キャンパス韓国 in 釜山では釜山大学校の学生が主導して実施した。同じくキャンパス日本 in 福岡では九州大学の学生と西南学院大学の学生がリーダーとなって実施した。例えば、キャンパス韓国では「日韓のこれまでの関わり」というテーマをもとに、日韓交流の歴史を先史時代から現代に至るまで調査し、最終プレゼンテーションを行なった。また、それぞれのグループに与えられた課題以外には、グループごとに自主的に計画を立て、それぞれの地元を紹介するようにした。

## 3) プレゼンテーション：ディスカッションをもとに

キャンパス韓国では、最終日に日韓 10 名の混合グループで調査した内容や講義内容をもとにディスカッションし、その内容を英語でまとめてプレゼンテーションした。プレゼンテーション準備は 10 名による活発な議論から始まる。講義を聞いて何を感じたか、フィールドワークではどのようなことに気づいたか、そしてプレゼンテーションでは何を中心に取り上げるか、などと続いた。短時間での英語による準備であったため、あるグループの学生は夜通しの作業となり、夜明け 4 時



まで作業したという。何よりも、韓国での1週間のプログラムを振り返りながら、自分たちの考えをぶつけあうことができたという達成感を得る学生は少なくなかった。歴史認識や領土問題など、下手すると構築した関係性を壊してしまうような問題も提起しあい、その内容をもとにプレゼンテーションを行ったグループもあった。

キャンパス日本でのプレゼンテーションは、福岡県内の企業で行うインターンシップの場で実施している。事前に各企業から与えられた研究テーマに基づき、各大学の複数のチームがそれぞれ独自に調査と研究を実施し、学生らしいアイデアを持ち寄ったプレゼンテーションを行ってきた。表2は、インターンシップ受け入れ企業である。基幹産業や商社、通信、観光、物流、飲食において福岡を代表する企業であり、参加学生の関心分野や専攻にそって参加企業を選択してもらう形式となっている。

表2 インターンシップの受け入れ企業別プレゼンテーションテーマ

受け入れ企業	プレゼンテーションテーマ
(公財) 福岡観光コンベンションビューロー	①福岡と釜山の第3国（東南アジア、東アジア）、相手国首都などでの共同観光客誘致プロモーションの効果的な手法—どこで、何を、どのように売り込むか— ②日本と韓国の観光交流（人的交流）が、一方通行にならず、双方向とも安定的にインバウンドを伸ばしていくための方策は—そのための福岡と釜山の役割は—
九州電力株式会社	再生可能なエネルギーの普及拡大方案
七尾製菓株式会社	アジア各国への菓子の嗜好を踏まえた進出戦略
日本通運株式会社	グローバル物流を最適化するためのアイテム
NTT 西日本株式会社	ブロードバンド回線（FTTH）を活用した新たな生活スタイル・行動スタイルの提案
住友商事九州株式会社	東アジアをつなぐ新しいビジネスプラン
株式会社やまやコミュニケーションズ	東アジアの食文化の特長を分析し、その特長を生かしたビジネス案
株式会社安川電機	10年後の社会情勢を踏まえて、10年後に向けた安川電機の新規事業を企画・提案する
株式会社ゼンリン	地図を活用したコトの提案

このインターンシップは、様々な社会問題に対する「問題解決力」を育てることを目的としている。プレゼンテーションは約2カ月かけて事前準備するが、その間、テーマとして与えられた社会問題の原因と向き合い、課題への関心を深めていく。また、その解決策を模索することで、自分の専門知識をどのように実社会に活かせるのか、考える機会にもなっている。学生のプレゼンテーション後には、企業の社員とディスカッションの場を持つ。社員やCEOと直接意見を交換できることは、日韓双方の大学生たちにとって得がたい機会である。インターンシップの実施は、受け入れ企業に就職することを目的としたものではないが、2015年度には本プログラムのインターンシップに参加した企業に就職した学生が現れた。

ここで二つの例を紹介する。NTT 西日本株式会社に参加した学生グループは、企業が提示したテ

ーマ「ブロードバンド回線を活用した新たな生活スタイル・行動スタイルの提案」に対し、教育や医療現場の問題をどのように解決するかについてプレゼンテーションをした。ブロードバンド回線を活用したディスカッション中心の授業というアイデアや、過疎地域の医療サービスを改善するというアイデアは、学生達の抱いた社会問題への強い関心と大学での実体験から生まれたものである。また、九州電力株式会社では、「再生可能なエネルギーの普及拡大方案」という課題と向き合った。日韓ともに資源小国であることを考えれば、再生可能なエネルギー源を見出し、それを実用化することは、両国が抱えている共通課題と言える。このような観点でプレゼンテーションに臨み、自分の研究テーマにつなげた学生もいる。インターンシップにおけるプレゼンテーションは、普段の座学と受け身的な学習から抜け出し、能動的な学び方を身につけるプログラムとして機能している。

このインターンシップは、福岡市と釜山市の国際的な地域連携に基づいて実施されてきた。地域社会の協力によってグローバル人材育成がなされるという意味では、これは他に例を見ない意義深い成果である。インターンシップの場を提供している企業の多くは、日韓の地域的な国際連携を目指す「福岡・釜山フォーラム」に参加している企業でもある。日韓双方の大学と企業の地域的な国際連携の試みが合体したという点でも、画期的な意味を持つプログラムだと言える。

### 2.3. 「キャンパスハワイ」(2年次)

1年次のキャンパス韓国とキャンパス日本で、互いの相違点に気づき、理解を深めたことを土台に、2年次には、日本でも韓国でもない、ハワイという第三の場所でキャンパスハワイを実施し、深化学習を行う。2015年度に日韓それぞれ10名ずつ、計20名が3週間参加した。

#### 1) 英語アカデミックプレゼンテーションクラス

グローバルアジェンダである安全保障、経済協力、社会・文化、教育、テクノロジーの5つのグループに分かれ、3週間にわたってグローバル社会を舞台にした協力の在り方について、日韓それぞれ2名ずつ、4名の学生が英語で意思疎通を図りながら、調査、ディスカッション、英語での最終プレゼンテーションに挑戦した。具体的なテーマ選定からスタートし、ハワイ大学図書館を利用した英語文献中心のリサーチ、ディスカッションをしながら意見を発展させていった。

渡航前の4月から7月までの4カ月間、担当教員の指導のもと、グローバルアジェンダに関する事前学習を行った。「A New era for Korea-Japan Relations Seven Tasks for Bilateral Cooperation<sup>5</sup>」をはじめ、国際協力に関する文献を読み、議論を通して理解を深めた上、5つの分野の中でどのグループに参加するかを学生自ら決めるようにした。ハワイ現地では、ハワイ大学の教員が英語文献で裏付けを行う方法やプレゼンテーションスキルなど、計6コマの授業を担当した。授業ごとに課題を課し、学生のモチベーションを維持させるとともに、課題に対するコメント、メールでのやり取りを通したきめ細かい指導が行われた。

#### 2) 特別講義：東アジアと米国の関わりを取り上げる

東アジアに対する米国の視点に触れるとともに、米国社会そのものを理解できるような内容構成にしている(表3)。ワークショップ型の授業も組み込まれており、小グループで議論しながら理解

を深めることができた。また、東アジアの地域協力については、他地域との比較を中心に講義を行い、米国と東アジア地域の関わりを理解することに重点を置いた。その他、ハワイの経済や移民の歴史を通して東アジアとのつながりを学ぶことができた。

表3 「キャンパスハワイ」における特別講義

- US Foreign Policy and Asian Security
- Asian Migration to Hawaii
- The Economy of Hawaii
- Innovation in American Business
- East Asian Regionalism and the US

### 3) ビジネスワークショップ

現地の新聞社、銀行、コーヒー製造会社、観光会社の4社でビジネスワークショップを実施した。日韓米3国の抱える共通テーマに対し、日韓の学生がそれぞれの国の状況を取り上げ、プレゼンテーションを行った。表4は、ビジネスワークショップの受け入れ企業と各企業から事前に提示されたプレゼンテーションテーマである。企業側からは学生の発表に対する講評とともに、米国の状況について説明してもらう形を取った。各国の状況と対応を比較しながら、類似性と相違点を見出す貴重な時間となった。例えば、Ohana Pacific Bankでは、消費者保護問題が取り上げられた。国によって懸案事項が異なってくることや、その対応方法においても違いが出てくることが見えてきた。また、Honolulu Star Advertiserでは、各国における紙新聞の生き残りをかけた取組みを比較しながら、それぞれの国の状況について理解を深めることができた。このように日韓米3国の比較ができたことは、1年次のインターンシップでのプレゼンテーションとは大きく異なる点であり、参加学生の視野を広げる効果があった。ワークショップをきっかけに海外で働くことへの関心が一層高まり、現地企業での長期インターンシップを希望する学生も出た。

表4 ビジネスワークショップの受け入れ企業別プレゼンテーションテーマ

Company	Presentation Theme
Honolulu Star Advertiser	Investigate newspapers' market situation in your country and propose the direction newspapers need to take for the future, and what they should do
Ohana Pacific Bank	Best Practices of Consumer Protection in Business
Hawaii Coffee Company	Investigate coffee's market situation of your country and propose a marketing strategy for Hawaii Coffee Company in your country
Roberts Hawaii	<p><u>For Japanese students</u> : Considering the weakening of the Yen to the USD over the past 3 years, what would you do to our existing business to continue the same guest counts?</p> <p><u>For Korean students</u> : While the South Korean outbound travel market has been strong over the past few years they remain a small fraction of our guests. What would you do to our existing business to improve our guest counts from this market?</p>

#### 4) フィールドトリップ

フィールドトリップでは、地元のハワイ大学生とともに、パールハーバーやハワイ史跡訪問、原住民の人々が住む村への訪問、またボランティア活動にも参加し、互いの感想を共有する時間を持った。現地の人々の生活に密着した体験ができ、現地でなければ学べない多様な視点に接することができた。そして、ハワイ福岡県人会やバートランド小林議員との交流会を通して、移民社会の歴史やその実態に直接触れることもできた。ハワイと福岡及びアジアの歴史的なつながりに気づき、移民の歴史を共有する機会となった。

### 3. 学生の意識変化

日本人学生は、韓国人学生とキャンパスを共有する中で何を得たのだろうか。何に刺激を受け、そこからどのような方向性をどう見出したのだろうか。2014年度と2015年度の学生へのアンケート結果をもとに分析した。

#### 3.1. 語学学習意欲の向上

図3は、1年次のキャンパス日本・キャンパス韓国に参加した学生を対象に行なったアンケートの中で「参加して役に立ったと思うこと」に関する回答である。語学学習への意欲向上や留学・海外志向の向上が多くを占めていることが分かる。記述式の回答では、韓国の学生との実力差を指摘する声が多かった。ここでいう実力とは、主に英語力やコミュニケーション力のことだが、その中でも特に英語力の高さにショックを受けたという回答が多かった。授業後に流暢な英語で質問し、英語でのディスカッションを主導する韓国人学生に対する高い評価が見受けられる。と同時に、英語の問題でうまく議論できなかったという悔しさや危機感を抱いた学生も少なくない。そして、その悔しさをバネに留学や語学勉強への意欲を表明している。韓国も日本も第一言語が「英語」ではないからこそ英語力の差を感じることもできたのである。これは欧米の学生との交流では得られない効果であろう。

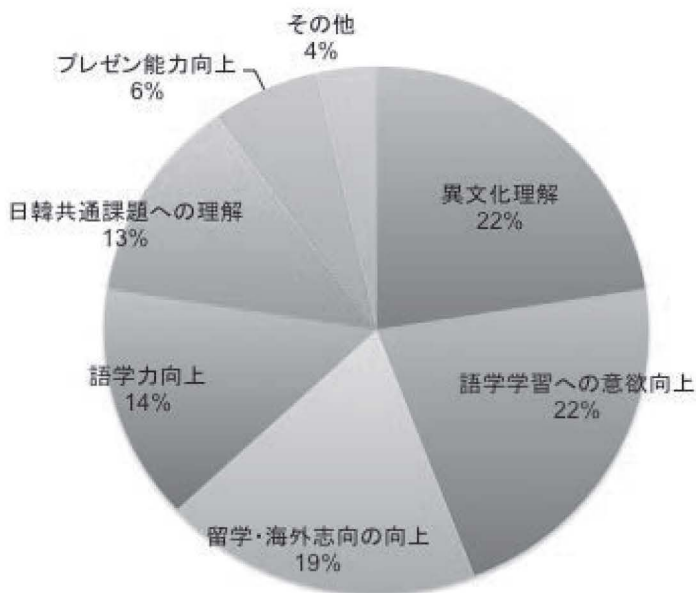


図3 参加して役に立ったと思うこと (九州大学生)

さらに韓国の学生が勉強熱心で見習うところが多く、その後互いに切磋琢磨しあいながら大学生活を過ごすようになったという日本の学生も少なくない。ここに、三人の日本人学生の感想を紹介しておきたい。

## 《学生①》

韓国人から「発信力」と「英語力」の面で日本人との違いを感じ、刺激を受けた。今回、韓国も日本も第一言語が「英語」ではないからこそ英語力の差を感じることができた。

## 《学生②》

韓国では基本的に英語で会話をしたが、想像していたよりも韓国人の英語力が高くて驚いた。フィールドワークのプレゼンテーションを考える際、発表が英語なだけに、英語で物事を考えなければならず中々苦戦した。私が自分の担当の台本を考えていた際にも韓国人に何度か英文の指摘を受け、それが非常に悔しかった。同世代なのにこんなにも英語力の差が大きいかと思うと自分が情けなくなった。この一件は、私の今後の学習意欲に火をつけてくれた。次に韓国の友人に会う時は自信を持って英語と、現在勉強中の韓国語で話せるようにこれからさらに精進したい。

## 《学生③》

自分も努力次第でグローバルな局面で活躍できる人材になれるかもしれないという自信を与えてくれた。と同時に、語学力、知識、海外経験等で自分はこのままでは世界に太刀打ちできないという危機感も感じた。その強い危機感があったからこそ、その後複数回の留学に挑戦したり、日ごろから世界と接する機会を作ったりし、自分をさらに高めるべく努力を重ねることができた。そして今は将来海外で働きたいと考えている。このプログラムが私を変えてくれたと思う。

### 3.2. 「学び方」の再考

現地に出向いて直接体験したことが、日頃の学びに対する姿勢にも影響を及ぼしていることが分かった。「授業形態別の学生満足度」においては、キャンパス韓国・キャンパス日本とも、フィールドワークに対する満足度が高かった。学生は10名ずつの日韓混合グループに分かれ、テーマを持って調査を行うだけでなく、地元を紹介しあいながら、普段の生活をシェアしたのが良かったようである。相手の学生が普段の生活の中で訪れるところに連れて行ってもらったことで、同世代の目線から紹介される相手国の魅力を体験できたわけである。学生達が自由に最初から計画を立て、現地に出向き、時間拘束もなく納得の行くまで見学できたことに満足している、という感想が多く見受けられる。

移動中には、普段疑問に思っていたことを話し合い、互いに理解を深める機会になったという声が多かった。グループによっては、受験や大学生活の話をはじめ、日韓間の懸案事項である歴史認識問題や慰安婦問題、領土問題など、マスコミを通して接してきた相手国の情報と、実際のそれぞれの社会で生活している人々の考えとの間にどのようなギャップがあり、なぜギャップが生じるのか、などを真剣に考えたようである。ある時には、互いの考えが鮮明に異なることを再確認する機会になったり、また別の時には、単なる誤解に過ぎず、偏見によって正しい認識が出来ていなかったことに気づく場面もあった。

フィールドワークは、直接街に出て市場や電車などで現地の人と会話を交わし、現地の雰囲気や実生活を肌で感じる貴重な機会でもある。あるグループは、韓国の電車で一人の年配の方から声をかけられ、「日本と韓国は互いに理解して手を取り合って協力して行かなければならない」と言われたという。韓国の年配者は日本に対し反感を持っているはずだと思っていた学生は、実は、日本

との協力を重視する一般市民もいるということに気付かされたそうである。

キャンパス日本に限って見てみると、インターンシップが最も満足度が高かった。約2ヶ月という長い準備期間を経て、その成果を企業の人の前でプレゼンテーションし、実際に働いている社員

からコメントをもらうことで、深い達成感と自信、また問題解決への新たな観点も得られたからであろう。不足しているところを発見し、それをどのように補っていけば良いのか、ヒントを得ることができたという感想が多く見られる。

参加学生が、講義や企業訪問のような受け身的なプログラムよりも、現場体験をもとに視野を広げられるフィールドワークとインターンシップにより興味を示し、積極的に参加していたことが分かる。講義の時間にも学生が互いにもっと意見交換できるように、担当教員は話題提供するだけにとどめてほしい、という要望さえあった。そこには、ディスカッションを通じて積極的に学ぼうとする学生の姿勢が見て取れる。さらに、「目先の情報からのみ判断するのではなく、自分の目で見て判断することを怠らない学びにしていきたい」、「もっと現地に行って直接体験しながら、その場でしか学べないこ

とを吸収していきたい」、という感想が多く見受けられた。これらの感想は、学生自らが、日頃の学び方を見直すきっかけになったことを示しており、そこからは、受け身ではなく、自ら体験し考えていくことの重要性に目覚めた姿勢が見て取れる。

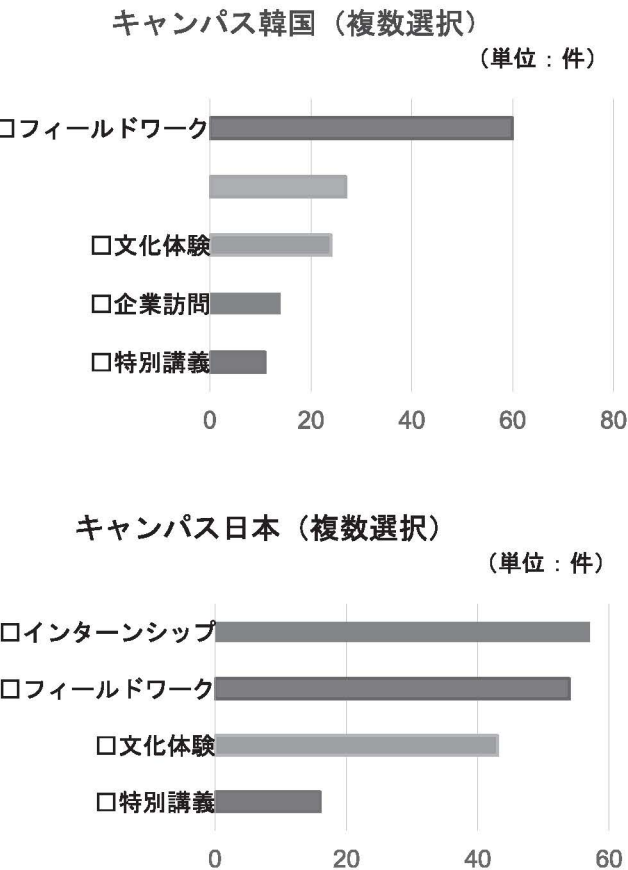


図4 授業形態別の学生満足度

《学生④》

疑問や懸念に対して他者を通してではなく、自分自身の目で見て判断しようと思うようになった。

《学生⑤》

最も勉強になったのはグループワークである。韓国人学生と日本人学生の混合グループで調査を行い、自分たちが学んだことのプレゼンを作るというものである。現地で直接見て判断することの重要性がわかった。英語、韓国語、日本語を使いながら話し合い、ひとつのものを協力して作ることがとてもむずかしいと感じた一方で、とても充実感を感じた。

《学生⑥》

私は韓国に訪れるまで、韓国人にはニュースで目にする反日デモをするまでもなくとも反日的な感情を持った人が多いのではないかと考えていた。しかし、実際に足を運ぶとそれは少数意見に過ぎないのだということが見えてき

た。これから私は目先の情報から判断するのではなく、自分の目で見て判断することを怠らない学びにしていきたいと考えている。もっと海外に行ってみて、直接体験しながら、その場でしか学べないことを学んでいきたい。

### 3.3. 相手に対する見方の変化

参加学生の感想から浮かび上がってきたことは、相手国に対するただの印象論が、具体的なストーリーを持った認識論へと変化したことである。現地での体験や交流を通して知り合った隣国の友人の目線から、韓国や日本を眺めるようになってきている。それまで絶対的であると思っていた自国の習慣や考え方を相対化し、柔軟な態度で相手を受け入れる態度を取れるようになったという感想もよく見受けられる。実際に現地を訪れ、同世代の学生と接しながら、「友達」となり、その友たちを通じて相手国を「眺める」ようになったからであろう。

渡航する前には、マスコミの報道から接していた「反日の国」韓国の影響で戸惑う場合は少なくなった。しかし、韓国社会における日本の存在の大きさに気づくとともに、韓国人全てが反日感情を抱いているわけではないことを知るようになったという答えが多かった。むしろ双方には違いよりも共通点が多く、親しみを感じたという答えさえある。嫌韓ムードが強まっている日本社会への警戒感を表した回答もあり、これからの日韓関係を切り開いていくのは次世代の自分たちであるという認識もにじみ出ていた。

《学生⑦》

メディアの情報を批判的に捉え、反日・嫌韓の構造についてなにが本当に正しいのかを考えていくことが大事である。そのためには、実際に日本と韓国の学生が交流していくことが必要だと思う。学生が将来、次世代を担っていく中で、どういう職業・立場についてとしても、その考え方の根本に日本と韓国は友人になれる国同士なのだという認識があれば、世代を重ねる中で日韓関係は徐々に改善していくと思う。

《学生⑧》

ネット上はもちろん、書籍でも嫌韓感情をあおるような媒体が日本国内では溢れており、こうした偏った情報を鵜呑みにしないよう心掛ける必要があると思う。

韓国の学生からは、日本に対する見方の変化が見受けられる。自分自身の立場を相対化し、双方の違いに理解を示すようになってきている。それまでの日本と日本人に対する認識において偏見が多かったのではないかと、互いがどれだけ誤解していたのか、日本の素顔に接近しようとする努力を怠っていたのではないかと、という気づきの言葉が多かった。また懸案問題に対する互いの認識と考え方がどれだけ違うのかも理解するようになったという。更に、日韓の経済連携などに触れ、両国関係の重要性について改めて気づいたという感想も多かった。ここで韓国人学生の感想を紹介しておきたい。

《学生⑨》

日韓政治摩擦の原因になっている慰安婦問題や歴史認識問題に対する日本人の見方を知ることができた。両国間の摩擦は、問題を解決しようとする意思と意思疎通の不足だと感じた。今回プログラムに参加して日本人学生と、敏感な問題について多く話しあいながら、互いの立場を知るようになった。また、両国がこれらの問題について間違った対応をしていることに気づいた。第三者の立場にあるアメリカ人講師の講義を聞き、アメリカ領事の話を開け

たことは非常に大きな意味がある。

《学生⑩》

私は日本と日本人に対してネガティブな印象を持っていた。マスコミと歴史授業の影響を受けていた。しかし、プログラム参加後、私がそのような偏見を持っていたことがいかに愚かなことであったのかが分かったと同時に、日本人と韓国人がどれほど親密になれるのかに気づいた。グローバルマインドを育てることを妨げるこのような偏見を克服できたことが私にとっては重要なものである。またこのプログラムは日韓がどれだけ重要な協力パートナーであるかを教えてくれた。

### 3.4. グローバルな視点の涵養（キャンパスハワイ）

2015年にスタートした「キャンパスハワイ」に対しては、1年次のキャンパス日本・キャンパス韓国との違いを認識しながら、日本でも韓国でもない、ハワイという第三の場所で日韓学生が協学することでより客観的に両国関係を認識するようになった、と語る学生が多く見られた。

特に、英語アカデミックプレゼンテーションを通して、韓国の学生との混合グループで議論しながら、その中身以上に、グローバルな視点から物事を考えるようになったことを成果としてあげていた。例えば、安全保障、経済、社会・文化、教育、テクノロジーの5つのグループの中で経済グループは、日韓がそれぞれの強みである医療やIT分野を通じて発展途上国ミャンマーを支援し、先進国と発展途上国の格差を埋めることについてプレゼンした。グローバル社会における日韓経済協力の意味を東南アジアの第三国へ広げる好発表であった。日韓が互いの経済的発展のために協力する必要性を認識するだけに留まらず、両国の協力がグローバルアジェンダに挑戦するための基盤となることを理解するきっかけになったのである。

具体的にプレゼンテーションテーマを選定し、ハワイ大学図書館での英語文献を中心とするリサーチ、英語でのディスカッションを通して議論を発展させる過程は、大変な努力と時間を要するものだった。しかし、3週間の課程を通して受け身の授業では決して得ることができないアクティブな学びを経験した。グローバル人材に不可欠な英語でのコミュニケーション能力を高めることが出来ただけでなく、長期海外留学や外国人と共同作業に取り組むことへの意識変化も体験したのである。

《学生⑪》

アカデミックプレゼンテーションを通して、プログラムが始まってから日韓の学生がより多くの時間を議論に割くことができたという点で1年次のプログラムとは大きな違いがあった。各講義で段階が踏まれていったので、発表まじかに議論が足りない中でプレゼンを完成させるという事にもならず済んだ。そのことで英語を使う機会も増え、プレゼンテーション能力を伸ばすことができた。共通課題について第三者の立場から考えることができ、これまででない視点を手にできたと思っている。

《学生⑫》

最終プレゼンテーションに向けた調査や討論をじっくりできた。昨年もプレゼンはあったが、各グループで深くまで討論しあう時間が限られていた。一方、今回は3週間という時間を十分に活用しながら、深くまで討論しあうことができた。韓国人2人と日本人2人の4人での文献探しや意思疎通がすべて英語である点、経済という難しいテーマでプレゼンの概要を一からつくらなければならない点など、困難を強いられる場面は多々あった。なかなか目的の文献を見つけられず、2週目に入ってプレゼンの概要を大幅に作り直すことになり、焦りや不安に駆られる毎



日だった。しかし、図書館や学校の教室、部屋に集まり、討論を重ねた結果、最終発表では、その成果を十二分に発揮できたため非常に良かった。少人数であったことにより、一人ひとりが日韓米関係について深く考えることができたように思う。

#### 4. 終わりに—1、2年生向けプログラムの重要性

本プログラムは、前身である「日韓海峡圏カレッジ」も含めれば、5年間の蓄積を有している。これまで日韓合わせて約500名の学生が日本と韓国、米国のハワイでキャンパスを共有してきた。本プログラムが果たしてきた役割を考えれば、参加条件を1年生と2年生に限定して、目的ある学習への意欲を引き起こし、グローバルな挑戦につなげてきた意義は大きい。1年生での経験がその後の大学生活を左右する影響の強さを鑑み、今後、1、2年生向けのプログラム開発・実施に最も力を入れるべきではないかと思われる。

2年を1クールとする本プログラムは、2015年度で1クールを終えたばかりである。1年次の日韓交流を通して互いの違いを受入れる柔軟さを養い、2年次にハワイ大学に集まり、グローバルな視点を養う深化学習を行なったことで、好スタートを切れたと確信している。今後、2018年まで4クールを実施する予定である。続けて基幹教育の総合科目との連携をもとに、日韓米7大学とのキャンパス共有を通じて外国の学生と協学することに重点をおきながら、さらなるプログラムの充実化を図っていきたい。

#### 参考文献

- ・岩渕秀樹（2013）『韓国のグローバル人材育成力 超競争社会の真実』 講談社。
- ・小此木政夫（2013）「分断国家と脱冷戦外交—対朝鮮半島外交」国分良成『日本の外交』第四巻、岩波書店。
- ・添谷芳秀（2012）「中国の台頭と日韓協力—認識の束縛を超えて」、小此木政夫・河英善編『日韓新時代と共生複合ネットワーク』慶應義塾大学出版会。
- ・第2期日韓新時代共同研究プロジェクト(2013年12月24日)『新時代の日韓協力—七つの核心的アジェンダー』日本外務省<[http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press24\\_000014.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press24_000014.html)>。
- ・Second Term Joint Research Project for a New Era for Korea-Japan Relations, 'A New era for Korea-Japan Relations Seven Tasks for Bilateral Cooperation,' Ministry of Foreign Affairs, Republic of Korea, 2013<[http://www.mofa.go.kr/news/pressinformation/index.jsp?mofat=001&menu=m\\_20\\_30&sp=/webmodule/htsboard/template/read/korboardread.jsp%3FtypeID=6%26boardid=235%26tableName=TYPE\\_DATABOARD%26seqno=348814](http://www.mofa.go.kr/news/pressinformation/index.jsp?mofat=001&menu=m_20_30&sp=/webmodule/htsboard/template/read/korboardread.jsp%3FtypeID=6%26boardid=235%26tableName=TYPE_DATABOARD%26seqno=348814)>。

<sup>1</sup> 岩渕英樹『韓国のグローバル人材育成力 超競争社会の真実』 講談社、2013年、56～82頁。

<sup>2</sup> 小此木政夫「分断国家と脱冷戦外交—対朝鮮半島外交」国分良成『日本の外交』第四巻、岩波書店、2013年、97～100頁。

- <sup>3</sup> 添谷芳秀 (2012) 「中国の台頭と日韓協力—認識の束縛を超えて」、小此木政夫・河英善編『日韓新時代と共生複合ネットワーク』慶應義塾大学出版会、2012年、80～82頁。
- <sup>4</sup> 第2期日韓新時代共同研究プロジェクト(2013年12月24日)『新時代の日韓協力—七つの核心的アジェンダー』日本外務省、28～29頁<[http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press24\\_000014.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press24_000014.html)>。
- <sup>5</sup> Second Term Joint Research Project for a New Era for Korea-Japan Relations, 'A New era for Korea-Japan Relations Seven Tasks for Bilateral Cooperation,' Ministry of Foreign Affairs, Republic of Korea, 2013<[http://www.mofa.go.kr/news/pressinformation/index.jsp?mofat=001&menu=m\\_20\\_30&sp=/webmodule/htsboard/template/read/korboardread.jsp%3FtypeID=6%26boardid=235%26tableName=TYPE\\_DATABOARD%26seqno=348814](http://www.mofa.go.kr/news/pressinformation/index.jsp?mofat=001&menu=m_20_30&sp=/webmodule/htsboard/template/read/korboardread.jsp%3FtypeID=6%26boardid=235%26tableName=TYPE_DATABOARD%26seqno=348814)>.